

# 「すく」(好)「このむ」(好)から見た長明と兼好

——類義語など使用する際の「価値評価」意識に基づきながら——

堀 川 善 正

はしがき

さきに拙稿『狂言綺語』と長明の文芸観(数寄)——方丈記『満沙弥ガ風情云々』と関わって——において、「数寄」のことも少々考察したが、その「数寄」は動詞「すく」の連用形の名詞化したもので、現在「すく」は普通、漢字「好」が当てられ、この「好」はまた「このむ」とも訓まれている。そして、これら「すく」「このむ」の間には一応、「親愛の気持ち、接近を欲する意」のごとき類似・共通した意義が認められるものの、よく考えると、微妙な差異、いや比較・対蹠的な意味・用法さえ有することが分かってくる。ところで、このように類似していて対蹠的な、基本的な心情語「すく」「このむ」などを実際使用する際には、その使用する人(また人々)の生活態度・人生観・価値観・性格等により、これらの両語

(それぞれの意味内容・用法など含む)は比較されて、好悪・軽重等の価値評価が個々に与えられていることが多いもの、すなわち身近かな家畜「犬」「猫」についても、「犬好きの猫嫌い」や「猫好きの犬嫌い」の人など、また食器類でも、箸とフォーク・スプーン等に、慣れ・好みなどさまざまあるように、それぞれ価値評価されていると思われるが、また逆に、それぞれにどのような価値評価を与えているかによって、それなりに、その人の態度・性格などの一斑をうかがうことができるもの、と愚考する。

そこで本稿では、先ず「すく」「このむ」の意味内容・用法の特色などを一応明確にし、次に両語を使用する際、長明・兼好がそれぞれを比較して、いかなる価値評価を与えているか、またその理由をも考察し、さて、その観点から、この二人の態度・性格の特色までを瞥見、探究してゆきたいと考える。

「すく」(好)「このむ」(好)から見た長明と兼好

一、「すく」「このむ」の意味内容・用法の

特色について——「好」(漢語)も

(a)「すく」

「すく」の意味内容・用法の特色としては、まず文献的に奈良時代には見られず、平安女流文学作品に初出であること、すなわち、

「恋・好色」の意として、

昔の若人は、さるすける物思ひをなんしける。(『伊勢物語』—四

〇)

玉すだれ糸のたえまに人を見てすける、心はおもひかけてき(『拾遺

集』—恋一、読人不知)

。すきたる、罪重かるべし。(『源氏物語』—帚木)

のごとく見られることである。

そして初期は、右の例のようにいわゆる目的語(対象物)を明示しない含みのある、しかも「る」「たる」(完了・存在)の付いた存在態の表現で、——その理由は後に触れるが、——後世になって、

。なんじらいやしきもの身として、連歌にすく事きのどくな事じや。(『虎寛本狂言』鱸包丁)……興味

。甘蔗にすいて自尾至本とて甘もない処から食ぞ。(『蒙求抄』—

四)……同右

。いづれも道をすくと云て、花やかなる方は聞えざる也。(『古今連談集』—下)……愛着・好む・嗜む意

。甘いをすいてまゐる衆も御座り、又、辛いをすく衆も御座る所で、

(『虎寛本狂言』伯母が酒)……同右

のごとく、格助詞「に」や「を」を伴って、その対象物を示すようになつてゐる。<sup>(注1)</sup>

ところで「すく」を、前掲の例のほか、

。すき給はざらむも、情なく、さうざうしかるべし。(『源氏物語』

—夕顔)……恋・好色

。すいたる人は、心から、やすかるまじきわざなりけり。(同一真

木柱)……同右

。関白殿、三月廿一日に「こと下襲縫はせ給ひけるほどにおそきなり。いとすき給へりな。」(『枕草子』—二七八)……風流・風雅。すこし、なよびやはらぎ過ぎて、すいたる方に引かれ給へり。

(『源氏物語』—匂宮)……同右

などの用例からも考えてみると、その意味の特色は、もともと気に入っているもの(「茫漠たる対象物」——まず「人間」、それから「風物」なども)に、デリケートに左右されやすい専一・没我的ななりふりかまわぬ有様で、執心・合体的に心引かれ、対象物に訴えるように自然と自分の方から動き接近してゆく、本能的で少し露骨

な心情の、無分別・無意志のいはず執念的な状態の性格にあると思考する。<sup>(注2)</sup>それで、前述した初期の「すく」の用例にいわゆる目的語

「ヲ格」を明示しないということは、このような本能的で少し露骨な心情の言明を和語的女性用語的に和らげるよう、なお茫漠たる対象物は直接志向的には表現しにくく、「すける」「すぎたる」と状态的に表現されがちであるためと思うが、また、この没我的・いはず執念的な「すく」の性格は、現代語の「すく」にまで認められる。

すなわち、このような「すく」は、情意表現「○○がすぎだ」のとき形状言（「対象語」を有する）になりやすく、しかも格助詞

「が」の性格<sup>(注3)</sup>（いわゆる現象文にも用いられ、ありのまま的・無分別的であるなど）とも応じて、その特色を、より發揮する。例えば、

「あなたがすぎだ。」は、

「あなたがすぎで、たまらない。」（執心の状態）

とも言えるが、もし「あなたを」なら、その無分別性は減少して、「たまらない」などの表現は後に付きにくくなる。かくして、「すく」の没我的、いはず執念的な性格は、格助詞「が」の性格と通じる面が認められ、これはまた、ひいては仏語「観念」<sup>(注4)</sup>の「念」（心を集中して思い、長く持ちこたえる、など）の性格にも、一脈通じる面があるものと愚考している。

そのうえまた、「すく」は、その「いはず・デリケートな求訴的

「好」から見た長明と兼好

な性格」から破調性をも帯び、結局それは、「能くことわりをきはむる道」（『発心集』）ともされる和歌の性格、すなわち漢詩とは異なって、デリケートな情緒で「対」<sup>(注5)</sup>をも破る、いはず求訴・執念的な性格とも通じており、このため、

古ノ歌仙ハ皆スケルナリ。然者能因ハ、人ニ、スキタマヘ。スキヌレバ秀歌ハヨムトゾ申ケル。（清輔『袋草子』）

大かた、歌は数寄の源也。心のすきてよむべきなり。しかも太神宮の神主は、心清くすきて和歌をこのむべきなり。（『西行上人談抄』）

の例のごとく、「すき」と「和歌」とに、密接な関わりが認められるもの、と愚考している。

ところで、この「すく」の名詞化した「すき」（数寄）は、やはり前述「すく」の意味に基づき、先ず「恋、好色、また、そのさま」の意で、

。さばれ、なほざりの御すきにはありとも…（『源氏物語』—宿木）  
。すこしはすきも習はばや。（同一蜻蛉）

。男のすきといふものは、昔よりかしこき人なく、この道には乱るためしども侍りけり。（『夜の寝覚』—二）

のごとく用いられるほか、「風流・風雅への執心」の意で、  
。只今のすきは、あぢきなくぞ侍る。（『宇津保物語』—葦開上）

「すく」(好)「このむ」(好)から見た長明と兼好

。人のすきと情とは、年月に添へて衰へゆく故なり。(『無名抄』)  
。哥枕とも見んとて、すきに事寄せてあづまの方へ行きけり。(同)  
のようにも用いられ、また、

。明後日教寄微行事示合(『明月記』—安貞三年三月一五日)

。むかしはすきといへば、歌の事に人の心え侍り。……(中略)：

…然るを、今茶の湯をおし出して、教寄といふは、歌道のすたれたるゆへなり。(『戴恩記』—下)

のごとく「風流・風雅の道である和歌・茶の湯」のことをも意味している。しかしてなお注目すべきは、後述(九頁)するが、長明の『発心集』などで、「すき」(教寄)が宗教的「解脱」への入口とも解されている点であると思う。

かくして名詞化した「すき」(教寄)は、「すく」の原義に基づき、もともと、好色的で少し露骨なほど、対象物に心引かれて求訴・執心的に徹した、いちずな意味を、その基盤・中核に持っていないながら、他面やはり、そのいちず求訴的な意が、より進んで、風流・風雅など高尚かつ深遠・透徹した意、また、その固定化・形態化した意をも有するようになったもの、と思考するのである。

(b)「このむ」

次に「このむ」は、前述「すく」とは異なり、一例ではあるが、

『万葉集』にも用例が見られる。すなわち、

。さす竹の大宮人は今もかも人なぶりのみこのみ<sup>△</sup>許能美<sup>▽</sup>たるらむ(卷一五、三七五八<sup>△</sup>中臣宅守<sup>▽</sup>)

とあり、しかも、最初から、「人なぶり」という、いわゆる目的語(格助詞「ヲ」格)をとる形の表現となっている。それも「好色・恋」ではなく、「興味・嗜好」の意として用いられている。

そして「このむ」の特色は、右の例やまた、

。なべてならず、もてひがみたる事このみ給ふ御心なれば、御耳とどまらむをや。(『源氏物語』—若紫) ……興味・嗜好

。今めかし事をこのみたるわたりにて、…(同—花宴) ……同右

。上はよろづの事にすぐれて絵を興ある物におほしたり。たててこのませ給へばにや、二なく書かせ給ふ。(同—絵合) ……興味・趣味  
。心の底まで好かずして、ただ人まねに道を好むが故なんぬり。

(『無名抄』) ……同右

。この男の家には前裁このみて造りければ、おもしろき菊など ……(『平中物語』—一九) ……趣向・風流

などの用例から考えるとき、「すく」と同様、「親愛・接近を欲する」性格を有しているものの、気に入り取り上げたもの「対象物」—「人」とは限らず広く「一般的に」を、分別・主体的に、自分の方へ引きよせ動かしたい意で、(このため、いわゆる目的語「ヲ」

格」をとる形になるのであり、その対象物に左右されたり動じたりせず、執着性も余りない、つまり「すく」の意を基盤には有しながらも、理性的分別性や自主・能動的な動作性の意を勝義的に持っている語と愚考する。<sup>(注6)</sup>ところで、このような「このむ」の分別・理性的、主体的な性格は、また現代語の「このむ」にまで認められ、一般に「このむ」は情意表現(いわゆる対象語「が」格を有する)の意にはなりにくい。それで、形容詞「このましい」においても、前述「すく」の場合とは異なり、一般に、「あなたがこのましい。」また「あなたがこのましくてたまらない。」などとは言わず、普通「あなたは、このましい。」となる。つまり「このむ」は、「が」ではなく、「Aは、○○です。」のごとき説明文に見られる「は」(係助詞)の、分別主体的に選り上げる性格に通じる面、また、ひいては仏語「観念」の「観」(広く深く、静かに見る)こと。落ち着き決定して心眼で見る、など)の性格にも一脈通じる面が認められる、と愚考するのである。

そして「このむ」は、その分別・理性的、主体的な性格から非專一的で余裕があり、「程々」(「よきほど」)を尊ぶ意、調和的な意になりやすく、結局それは、漢詩(和歌と異なり、「対」により調和的意味を表現)の性格に通じ、「すく」よりも漢語「好」(特に動詞の場合)に近く、漢語直訳のかつ男性用語的であり、またこの

「すく」(好)「このむ」(好)から見た長明と兼好

ため、対的・詩的な、いわゆる「ますらをぶり」の『万葉集』に一例ではあるが、前掲のごとく見られたものと思う。

ところで、「このむ」の名詞化した「このみ」も、やはり前述した「このむ」の性格のためか、「すき」(数寄)のごとき「恋・好色」の意はなく、

・この方の御このみにはもて離れ給はざりけり。(『源氏物語』―夕顔)

・上の好に下は随ふ間、世のあやうき事をかなしんで、心ある人々は歎きあへり。(『平家物語』―二、六代被斬)

・人のありさまをあまた見合はせむのこのみならねど、……(『源氏物語』―帚木)

などのように、主に「嗜好・注文・希望」の意で、そしてまた、

・取出したる一品は、昔蒔絵の織部形、好みを尽せし三ツ組の、懐中盃下重ね、……(人情本『春色梅児誉美』)

・本舞台、三間の間、引抜きの障子屋体。中足にて好みあり、左右

の柴垣庭先の模様よろしく、……(歌舞伎『梅柳若葉加賀染』―大詰)……意匠を俳優にまかせること

のごとき「趣向・風流」、また歌舞伎用語ともなっている。

かくして「このみ」は、「すき」(数寄)とは異なり、好色の露骨な意も、また高尚かつ深遠な意も余り見られず、むしろ、ほどほど

「すく」(好)「このむ」(好)から見た長明と兼好

ど(中庸的)に調和した体裁のよき・格好よさといった意がうかがわれる。

ところで、このように「このむ」について見てくると、「色」(女色)〈△▽このむ〉というのは、一体どのような意味か、気にかかると、ここで、「色このむ」また「色このみ」を、好色の意の「すき者」と比べながら考えたい。しかしてこれは、前述「すく」また「このむ」の語の意味からすると、「色このむ」「色このみ」は、多感的な選択眼を有する日本の情趣(道德面など一応問わない)や、穏当な程よき教養面に基ついて異性を選び捜し求めることで、「上品」と高く評価されがちである——それも、熱心に求め過ぎると、浮気的傾向になると思われる——のに対し、「すき者」は、異性なら誰でもと、色こくて露骨・執心的で、多情なもの——そのため自然と浮気的傾向になる——として、だいたい「下品」と低く理解・評価されがちであつて、両者は一応、このように対照的な意を有していると考ええる。

ところで、この視点からすれば、『伊勢物語』五十八段は、冒頭、地の文の、

むかし、心づきて色好みなるおとこ、長岡といふ所に……

においては、男は、情趣的選択眼をもつて女を捜し求める「色好み」として、むしろ上品に高く評価され記述されているが、続いて、

女の詞の、

「いみじのすき者のしわざや。」

では、男は、「いみじく」色こい「すきもの」として低く評価され、からかわれている表現と理解される。

また、同六十一段の、女の詞の、

「これは、色好むといふすき者。」

については、従来いろいろの説が見られるが、私はやはり、女が男をからかい評した詞として、

この男は、「情趣をわきまえて、よい女を選び捜し求めている」(色このみ)と噂されているものの、実は、「女なら誰でも」という、度を越して多情な「色濃きすき者」で、くだらない「大好色漢」だ。

のごとき意に解したい。

ところで「色好みの女」(選択眼をもつて男を捜し求める女)は、関係した男にとって、「昔、おとこ、色好みなりける女に逢へりけり。うしろめたくや思ひけん。」(三十七段)のごとく不安なものになる、と愚考される。——しかして、このような「色このみ」と「すき者」の意味評価の差は、両語が併用され、対比的な文脈で用いられているような場合に、特に認められるものと愚考しているが、今後なお検討したい。

\* 「好」(漢語)

ここで漢語「好」について少し考えたいが、これを漢和辞典類で見るとき、その意味・用法として、だいたい、形容詞的用法(a)と動詞的用法(b)がある。その用例として、前者(形容詞的用法(a))は、

。作此好歌。(詩『小雅』何人斯)

。雖無好友、式燕且喜。(詩『小雅』車螯)

。新葉多好陰、初筠有佳色。(『白居易』晚涼詩)

のようであって、「美しい・よい」の意味であり、語源としては、「解字」会意。女と子とから成り、若い女の美しさの意。ひいて、このましい、このむ、よいを意味する。また、巧に通用する。「

(『角川中辞典』)のごとく考えられる。

また後者(動詞的用法(b))は、

。父信讒而不好。(『楚辭』九章、惜誦)

。人之好我。(詩『小雅』鹿鳴)

。惟仁者能好人、能恶人。(『論語』里仁)

。齊宣王好射。(『呂覽』壅塞)

のようであって、だいたい目的語をとって他動詞的に用いられ、前述の「このむ」に近い意味であり、語源としては、「なりたち」会意。女が子をいづくしんでいるさまにより、いづくしむ、ひいて「この

「すへ」「好」「このむ」「好」から見た長明と兼好

む』『よむ』の意を表わす。「(『角川新辞源』)のごとく考えられる。

ところで、和語の「すく」は、前述のごとく、初期には、いわゆる目的語などらず没我的な「愛」の意が認められるが、漢語「好」は殆ど目的語をとっており、「我」と「対象(汝)」の対立的意義が認められ、この点からも、和語の「すく」よりも「このむ」の方が、漢語「好」の意に近くて、まずその訓となったものと愚考される。

しかも、和語の「すく」にもまた、いわゆる目的語(「ヲ」格)をとる例が前述のごとく現われてきて、「このむ」の意味・用法に接近してゆき、結局「好」字を「すく」とも訓むようになった。かくして漢語「好」は、「すく」「このむ」という微妙な差異のある両訓を有することとなったものと愚考する。

それで、例えば「好好」の語の意義にしても、漢語では、㊦喜ぶさま。㊧甚だよい。㊨よい者を好む。(『大漢和辞典』)であるが、和語では、「すぎこのむ」と訓み、「好」の「すく」また「このむ」というデリケートな両意がこめられている。これは、日本語には、「が」と「は」、また「いはんや」と「まして」など、微妙な使い分けがあるが、それと似ているものと思う。

次に、前述日本語の「色ごのみ」「すぎ者」と関わって、漢語「好色」の意味・用法について少々考えたい。まず「好色」の「好」が形容詞的用法(a)となっているものとしては、

「すく」(好)「このむ」(好)から見た長明と兼好

・好色、人之所欲也。妻帝之二女、而不足<sub>レ</sub>以解<sub>レ</sub>憂。

(『孟子』万章上)

・目不得<sub>レ</sub>好色、耳不得<sub>レ</sub>音声。(『莊子』至樂)

・夫人之好色、非脂粉所能飾。(『新語』本行)

のごとく「美しい色・美人」の意であり、また「色をこのむ」意の

動詞的用法(b)のものとしては、

・吾未<sub>レ</sub>見<sub>レ</sub>好<sub>レ</sub>徳如<sub>レ</sub>好<sub>レ</sub>色者<sub>レ</sub>也。(『論語』子罕)

・寡人有<sub>レ</sub>疾、寡人好<sub>レ</sub>色。(『孟子』梁惠王上)

・寡人有<sub>レ</sub>汚行、不幸而好<sub>レ</sub>色。(『管子』小匡)

のように見られるが、この中国語「好色」は、前述の、道徳面を一

応切り離れた日本の情趣の場合(むしろ宗教と関わる)とは異なり、

倫理道徳とも関わって総合的に評価されている。すなわち「好色」  
(注)

は自然の欲情としてやむをえず、また適当に必要なものであって、

「好色不<sub>レ</sub>淫」(好色ではあるが、みだらでない。詩経の國風の評

語)のごとく、道徳に準じ得るとともに、また「好色必悪心」のご

とく徳にそむく欠点をも有すると解されている、と愚考する。

## 二 「すく」「このむ」の語から見た長明と兼好

### (1) 両語に対する長明・兼好の価値評価

まず長明の場合は、「このむ」の語も「好ましい」意の文脈で、

二条院和歌このませおはしましける時、……(『無名抄』一〇)

さて、なにことをも好むほどに、その道にすぐれぬれば、……(同、

一三)

いみじきことなり。昔、色いろのみのわざともこのみてしけるわざ

なり。(同、三五)

。まして歌は心ざしをのべ、耳をよるこはしめむためなれば、時の

人の翫び好まんに過ぎたる事やは侍るべき。(同、六七)

のごとく多く用いられてはいる。しかしながら、数こそ少ないが、

長明は、「すく」(意味内容など含む)の方を、心情・心底的な状態

表現、つまり、本質・根本的、絶対的なこととして、「このむ」よ

り重んじていると思われる。それは、「騒々しい歌会」について述

べたところの、

。……たかく詠するをよきこととて、くびすぢをいららかし、声を

よりあげたるさまなど、いみじう心づきなし。すべてにぎははし

きにつけても、しななくやさしかるにつけても、わざとびたり。

地には人の心の底まですかずして、ただ人まねに道をこのむゆゑ

なめりとぞ。(『無名抄』五四)

の例文や、

・頼政道にすける事



俊恵云く、頼政郷は、いみじかりし歌仙なり。心のそこまで歌になりかへりて、常に是をわすれず。心にかけて、鳥の一声なき、風のそそとふくにも、……(同、五六)

において、「心のそこまで」「心にかけてつ」などの文句とともに「すく」が用いられていること、また右前例の騒々しくてよくない歌会を「ただ人まねに道をこのむゆゑ」としている文意、文脈によっても、明らかであると愚考される。

しかして、「すく」の連用形から名詞化した「すき」(数寄)は、長明の場合、次のごとく、文芸また宗教的に非常に重視されており、彼が特に「すきもの長明」と呼ばれる所以であると思われる。――

すなわち、彼の歌論書『無名抄』では、文芸(和歌)に執心する「すき」や「すきもの」が賞揚され、

……我よめる歌、「いつも初音の心ちこそすれ」といふ歌を、ここかしこにてうたはせければ、時の人、「有りがたきすき人」となんいひける。(二八)

#### ・頼実数寄事

左衛門の尉くら人頼実は、いみじきすき物なり。和歌に心ざし深くして、……(七六)

……歌枕ども見んとて、すきにことよせて、あづまの方へ行きけり。(七七)

「すく」(好)「このむ」(好)から見た長明と兼好

のごとく用いられており、また、彼の宗教的説話集『発心集』では、特に、

。時光、茂光、数寄天聴に及ぶ事

……これらを思へば、この世のこと思ひ捨てんことも、数寄は、殊に便りとなりぬべし。(第六、七〇)

……心に染みつこの歌を詠じては、泣く泣く尊勝陀羅尼を読みぞ後世を弔ふ。又詠めては、さきのごとく誦す。……いみじかりける数寄ものなりかし。……中にも数寄と云ふは、人の交はりを好まず身のしづめるをも愁へず、花の咲き散るをあはれみ、月の出入を思ふに付けて、常に心を澄まして、世の濁りにしまぬを事とすれば、おのづから生滅のことわりも頭はれ、名利の余執つきぬべし。これ、出離解脱の門出に侍るべし。……かの蓮如といふ数寄聖、もとより情深き心にて、いと悲しく覚えけれど、……(第六、七一)

のごとく、「すき」(数寄)は「情深きところ」を逆転的に生かして、その風流的執心・執着をも離れる大切な宗教的解脱への入門として重要視されている。<sup>(注10)</sup>

ところでこれは、彼の生きた平安末、五大災厄(方丈記)や源平合戦など、時代転換期の混沌とした、いわゆる末法の醜い不安な世において、情にもろく凝り性で執念的な彼が、特に父の死後、苦勞

いや苦悩の連続する生活で、いくら努力しても努力しても今一歩のところまで失敗、厳しく自己を反省・追求しながら「つひに短き運を悟りぬ。」との自覚にまで達したこと、つまり彼が、自己をむき出しにして有頂天になり他人につけ込まれやすく、「切り替え」が下手で場面々々に適当にうまく応じにくい性格で、余裕も少なく対象(物)の動きに動じ執われながら、しかもまた、そのような自己を徹底的に反省・追求し、何か確かなものを他力的に求めようとしていたことと関わっている、と愚考するが、これは結局また、前述「すく」の語の性格とも一脈通じるところがあると思うのである。

次に兼好の場合は、『徒然草』に「すく」「このむ」両語とも見られるが、「このむ」の方が多く、「すく」は二例だけ、それも「すく」(その意味内容も含む)は、

。よき人は、ひとへに好けるさまにも見えず、興するさまも等閑なり。片田舎の人こそ、色こく方はもて興ずれ。(一三七段)

。若き時は、血氣内に余り、心物に動き、情欲多し。……色に耽り情にめで、行ひを深くして、……好ける方に心ひきて、永き世語りともなる。身を誤つ事は、若き時のしわざなり。(一七二段)のように、無教養・無分別・無思慮の意を有するものとして、低く価値評価されている。これに対して「このむ」(意味内容も含む)

は、分別的・文化的なものとして重んじられてはいるが、それも、真乗院に、盛親僧都とて、やんごとなき智者ありけり。芋頭といふ物を好みて、多く食ひけり。(六〇段)の「やんごとなき智者」の場合のような、よい意味・文脈に用いられることは稀で、多くは、

。……上達部・殿上人、上さままでおしなべて、武を好む人多かり。……その家にあらずは、好みて益なきことなり。(八〇段)

。堀川相国は、美男のたのしき人にて、そのこととなく過差を好み給ひけり。……(九九段)

。「囲碁・双六好みて明かし暮らす人は、四重・五逆にもまされる悪事とぞ思ふ」と、或ひじりの申しし事、耳に止まりて、いみじく覚え侍り。(一一一段)

のごとくよくない文意・文脈の中に使用されており、その「よし・悪し」は結局、「何をこのむ」かによって決まるが、ともかく、この「このむ」の語は、対象物中から何かを分別的に取り上げ、そこから「よし・悪し」が決まるものとして、『徒然草』で重要視されている。

ところでも、例の「色このむ」については特に、

。方にいみじくとも、色好まざらん男は、いとさうさうしく、玉の盾の当なき心地ぞすべき。……(三段)

。男女の情も、ひとへに逢ひ見るをば言ふものかは。逢はで止みにし憂さを思ひ、あだなる契りをかこち、長き夜をひとり明かし、遠き雲井を思ひやり、浅茅が宿に昔を偲ぶこそ、色好むとは言はぬ。……(一三七段)

などとして、「すき」(好色)的行動をも分別自覚的に、余裕をもって適切・程々にするのがよい、といった意味・文脈で用いている。それで、このような認識を持っていた兼好は、いかにも噂のごとく艶書・艶歌の代作も可能であつたらうし、前述の長明にはできないところと愚考される。

しかして、このように兼好が分別的な「このむ」を重視し、「すく」を低く見たのは何故であろうか。——それは、彼の生きた時代が長明より約百年後、一般に、京都と鎌倉、公家と武士など勢力二分して抗争し、去就などの適切・自主的な判断に追われる南北朝前後の混乱の世であり、また彼個人としても、愛顧を受けた後宇多院崩御後、あちこちに対する気苦労・不本意な生活の中で、長明とは異なり、極端に凝るよりも、あれもこれも兼ね好む、程々を重んじる傾向の彼が、場面処理「切り替え」の上手な性格、しかも恬淡として余裕があり、対象(物)の動きに執われず動ぜず達観する自主的な性格としていよいよ磨かれていったためと愚考するが、これも結局、長明が「すく」の語の性格と通じるところがあつたのでは

「すく」(好)「このむ」(好)から見た長明と兼好

対照的に、兼好の場合は、「このむ」の語の「分別・理性的、主体的な性格」と一脈通じるところが認められると思うのである。

## (2) 両語に対する価値評価から見た長明と兼好の特色

前述のように、「いぢず・デリケートな求訴・執念的性格」の「すく」の語を心情・心底的なこととして、「このむ」の語よりも、より重要と価値評価していた「すき型」の長明は、やはり自分の苦しかった過去・経歴を心底よりしみじみとふりかえりながら、『方丈記』で、

。すべて世の中のありにくく、わが身と栖との、はかなく、あだなるさま、またかくのごとし。いはんや、所により、身のほどにしたがひつつ、心をなやますことは、あけてかぞふべからず。

。すべて、あられぬ世を念じ過ぐしつつ、心をなやませること、三十余年なり。その間をりをりのたがひめに、おのづから短き運をさとりぬ。すなはち、五十の春を迎へて、家を出でて、世を背けり。

のごとく「心をなやます」などと述べ、またその家集『長明集』でも、「述懐のこころを」として、

。奥山のまさきのかづらくり返しゆふとも絶えじ堪へぬ歎きは  
。うきながら杉野のきぎす声立ててさをどるばかり物をこそ思へ

。花ゆゑにかよひしものを吉野山心ほそくも思ひたつかなのように、「堪へぬ歎き」「心ほそく」などと表現している。——

もそも、「自己意識」とは、「変動的なそのものの内部に、時間的・空間的に全面統一の同一性を認める意識」と愚考するが、「すきもの長明」は、自己を空間的よりもやはり時間的に把握し、過去をふりかえりながら詠歎しているものと思われる。そして、

。わが身、父かたの祖母の家をつたえて、ひさしくかの所に住む。その後、縁かけて身おとろへ、しのぶかたがたしげかりしかど、

つひにあととむることを得ず。三十あまりにしてさらにわが心と一つの庵を結ぶ。(『方丈記』)

。……おのずからことの便りに都をきけば、この山に籠りあてのち、やむごとなき人のかくれ給へるも、あまたきこゆ。ましてそのかずならぬたくひ、尽くしてこれを知るべからず。たびたびの炎上に亡びたる家、またいくそばくぞ。ただ仮の庵のみどけくして、恐れなし。(同)

として、自分の過去から現在の、比較・反発的、執念・未練的な述べを述べており、なお、

。……私の教へ給ふおもむきは、事にふれて、執心なかれとなり。

今、草庵を愛するものとがとす。閑寂に着するも、さはりなるべし。

(同)

として、その否定・転換、厳しい反省的告白ともなっている。

しかも、いちずデリケートな癡り性の「すきもの長明」は、自ら「狂」的、変人・奇人的になりがちでありながら、そう思われることを好まず、ただ、そのような時には、

。…今、さびしき住まひ、一間の庵、みづからこれを愛す。おのづから都に出でて、身の乞匄となれることを恥づといへども、帰つてここををる時は、他の俗塵にはすることをあはれむ。(『方丈記』)のごとく、反発的に、自ら心を慰めている。

これは、『摩訶止観』第七章に「……まさに徳を縮め瑕を露わし、狂を揚げ実を隠し……」とあるが、長明は、特に狂を揚げ実を隠さなくても、地から狂的であつて、実のよいところ、その価値は隠れがちとなり、他人に知られにくい性格であつた。そして『方丈記』によって、彼の没後約四〇年の『十訓抄』で、やっとその真価が認められたもの、と愚考する。

しかして『方丈記』の終章部では、

。……みづから心にとひて、いはく、世をのがれて山林にまじはるは、心を修めて道を行はんとなり。しかるを汝、姿は聖人にて、心は濁りにしめり。栖はすなはち、浄名居士のあとをけがせりといへども、たもつところは、わづかに周利槃特が行ひだに及ばず。もしこれ、貧賤の報いのみづからなやまずか。はたまた、妄心の

いたりて狂せるか。

などと述べているが、結局彼は、晩年でも「すき型」の真摯模索の徹底人であり、絶えず心の安定を求め、「自己確立」の否定的追求をしている、しかも、そう自認している人であって、一般に修業者は「迷↓悟↓迷↓悟……」となるが、彼はその中で、主に「迷」の悲観・反省的心境に立って、「まだ至らない。分からない。」(『方丈記』にも、「知らず」「知るべからず」のごとき文句が散見される)として、「すぐれた他」を尊びながら懺悔・反省的告白をし、自己否定・転換、他力(信仰)的向上を図り、自己の真実・誠を徹底的に追求しているもの、と愚考する。

このようにして、彼の、「すく」の語を重視しているという観点・角度から眺めてみても、それなりに、その生活態度や性格などの特色が、より明確・浮き彫りに照らし出されてきた、と私には思われるのである。

次に兼好について考えたい。前述のごとく「分別・理性的、主体的な性格」の語「このむ」を「すく」よりも重視する「このみ型」の兼好も、若いときは、その『家集』にも、

とにかくに思ふことのみあれば

。つきもせぬみだの玉のなかりせば世のうき数に何をとりまし

「すく」(好)「このむ」(好)から見た長明と兼好

つらくなりゆく人に

。いまさらに変るちぎりとおもふまではかなく人をたのみけるかな  
などと詠じて、多情多恨な「すき」的傾向が見られるが、しかし、『徒然草』においてはやはり、

。万の咎あらじと思はば、何事にもまことありて、人を分かず、うやうやしく、言葉少からんには如かじ。男女・老少・皆、さる人こそよけれど、殊に、若く、かたちよき人の、言うるはしきは、忘れ難く、思ひつかるるものなり。万の咎は、馴れたるさまに上手めき、所得たる気色して、人をないがしろにするにあり  
(二二三三段)

のごとく、分別的によくわきまえた処世法を丁寧に説いている。

それで彼は、長明のような「狂」的、変人・奇人的というよりも、むしろ広く達観していて、『徒然草』一九四段の「達人の、人を見る眼は、少しも誤るところあるべからず……」の「達人」にも、兼好自らのことをも含ませているとも思われるものの、次のごとく、三十二段までの、いわゆる第一部(情緒的な箇所)ではあるが、体裁・形を重んじて、

。人は、かたち・ありさまのすぐれたらんこそ、あらまほしかるべけれ、物うち言ひたる、聞きにくからず、愛敬ありて、言葉多からぬこそ、飽かず向はまほしけれ……(『徒然草』一段)

などと述べたり、また、

。……日暮れ、塗<sup>ぢ</sup>遠し。吾が生既に蹉跎<sup>ちだ</sup>たり。諸縁を放下すべき時なり。信をも守らじ。礼儀をも思はず。この心をも得ざらん人は、物狂ひと<sup>ぶ</sup>も言へ、うつつなし、情なしとも思へ。毀<sup>ぶ</sup>るとも苦しまじ。眷むとも聞き入れじ。(同、一一二段)

と言って、自己確立(達成)の、自信ありげな、物狂的「聞き直り」ともなっている。

しかして彼は、いわゆる「物狂い」的な僧についても、例えば増賀ひじりのことなども、長明の『菟心集』とは異なり、ただ概観的結果・外面的大要だけあげて、具体的内面的経過など殆ど述べてはいない。また、自らのことについても、長明とは異なり、具体的な懺悔反省的告白よりも、

。八つになりし年、父に問ひて云はく、「仏は如何なるものにか候ふらん」と云ふ。父が云はく、「仏には、人の成りたるなり」と。

また問ふ、……「問ひ詰められて、え答えずなり侍りつ」と、  
(父) 諸人に語りて興じき。(『徒然草』二四三段)  
のように幼少時の誇示的追憶談となっている。

また、「心」についても、いわゆる「心の苦しみ」については殆ど触れず、

。……虚空よく物を容る。我等が心に念々のほしきままに來り浮ぶ

も、心といふもののなきにやあらん。心に主あらましかば、胸の中に、若干の事は入り來らざらまし。(『徒然草』二三五段)  
のごとく、「心」を自主的に保つことのむずかしさなどを教訓解説的に述べている。しかも、「自己」についても、

。道を学する人、夕には朝あらむ事を思ひ、朝には夕あらむ事を思ひて、重ねてねんごろに修せんことを期す。況んや一刹那の中において、懈怠の心ある事を知らんや。何ぞ、ただ今の一念において、直ちにする事の甚だ難き。(『徒然草』九二段)

のように、過去の自分よりも、「只今の自己」を見つめよと説いており、また「月花」についても、「すべて月花をば、さのみ目にて見るものかは。」(『徒然草』一九段)などと言い、現存の「月花」を遠くから観念的に偲ぶのをよしとして、長明のように眼前の事物をたよりに彼方に浄土などを追求的に観念し(注4參)ようとは、余りしていない。

このように見てくると、前述の、分別・理性的・主体的性格の意を有する「このむ」を尊重している『徒然草』での兼好は、練達・達観の徹底した、そして「心」の安定・「自己確立」を既に達成した、少くとも、そう自認している人であって結局、前述の「迷↓悟↓迷↓悟……」となる、その中の、主に「悟」の恬淡たる心境に立って、「自分はもう悟った。分かった。」と見下さんばかり自信あ

りげに語る、肯定的自己拡充、自力的向上を図っている姿勢であると思われる。

ところで、このことは、『徒然草』七四段の、

。……身を養ひて、何事をか待つ。期する処、ただ、老と死とにあり。その来る事速かにして、念々の間に止まらず。これを待つ間、何の楽しみかあらん。惑へる者は、これを恐れず。名利に溺れて先途の近き事を顧みねばなり、愚かなる人は、また、これを悲しぶ。常住ならんことを思ひて変化の理を知らねばなり。

においても明らかであると思う。すなわち、本段の「惑へる者」は無智な俗人であるが、「愚かなる人」は一応の道理は知った人と考えられ、しかも兼好は、その前者を「これを恐れず」、後者を「また、これを悲しむ」として、ともに不可としているところに、他をも把握し分別的に見下さんとはかりの、彼の自信を私は感じる。——しかししてこれは、安良岡康作氏『徒然草全注釈』に、本段について、  
。……兼好の立場は、世人の四方に馳求し、営々として生活を続けるありさまを、宗教的な高い立場から見おろして、それに仮借なく批判の鞭を加えているといった趣が感ぜられる。ここには、その意味で、彼の到達した境地と熟した信念が現われていると言えよう。

と解説されていて、確かな一つの裏付けを得た思いであった。

「すく」(好)「このむ」(好)から見た長明と兼好

かくして、前述のごとく、一応類似・共通した意義を有しながら、微妙な差異、比較・対照的な意味・用法を有する基本的性情語「すく」「このむ」について、実際に使用する際、両語を比較し、いづれをいかに評価・尊重して用いているか等の観点から考察すると、長明と兼好の類似しているようで比較・対照的な差異のある、それぞれの態度・性格などが、より明確に照らし出され浮き彫りにされてきたように、私には思われるのである。

#### (注)

(1) このことは、宮地敦子氏『「きらふ」「すく」考』(言語と文芸六五号)でも述べられ、例外的な用例に対する検討も加えられている。

(2) 『岩波、古語辞典』の「コノミ」の項に、「類義語ヌキ(好)は、気に入ってそれに引かれ、前後の見境もなく、気持・行動がそれへ走って行く意。」とある。なお、『類聚名義抄』には、「好」にスクの訓なく、「溜」にムサボル・スクなどの訓が見られる。(宮地敦子氏、前掲の論文で指摘)また、「すく」の語源については種々あげられるが、本論で述べたその意義よりすれば、「腹がすく」「食く」なども関係があるものと愚考される。

(3) 拙稿『国語および英語における主語・主題について』(昭和42年度、京都府立学校・研修の報告)において、「が」のことは15頁、「は」のことは20頁、また75頁などにあげておいた。

(4) 「観念」の意義・用法については、拙稿『方言文記「観念」のたよりなきにしもあらず』の解釈——仏語「観念」を中心に——(池坊短期大学紀要第十号)で、管見に入った中国の例またわが国古来の用例もあ

「すく」(好)「このむ」(好)から見た長明と兼好

げながら述べた。

(5) 拙稿『狂言綺語』と長明の文芸観(数寄)——方丈記『満沙弥が風情云々』と関わって——(池坊短期大学紀要第十三号)(52・53頁)でも、和歌の「対」のことに触れておいた。

(6) 『岩波、古語辞典』の「好み」の項に「好み——性分に合うものを選びとって味わう意。」とある。なお、「このむ」の語源については種々説があるが、本論で述べたその意義よりして、「請い折む」などのごときものを愚考している。

(7) 『伊勢物語』第六十一段「色好むといふすぎ者」については、岡本敬道氏「『すぎ』の系譜『伊勢物語』に見る「すぎ」」(宇部短期大学学術報告第16号)の論考があり、「色好むといふすぎ者」の解釈の諸説をあげながら「色好む」と「すぎ者」の関わりを論じておられる。

(8) 拙稿「方丈記『いはんや』『まして』少見——漢文の抑揚と関わりながら——」(『同志社国語学論集』所載)に、「いはんや」「まして」の微妙な差異について述べた。

(9) 中国の詩の政治的・倫理的なことについては、吉川幸次郎述、黒川洋一編『中国文学史』(25～26頁)にも説かれている。

(10) 『無名抄』の数寄と『発心集』の数寄のそれぞれの特色は、前掲拙稿『狂言綺語』と長明の文芸観(数寄)——方丈記『満沙弥が風情云々』と関わって——(池坊短期大学紀要第十三号)で述べた。

(付) 本稿の大体の要旨は、昭和五十八年九月十七日の仏教文学会・西部例会(大谷大学において)で発表したものである。

——昭和五十八年十二月記(旧姓、久山)——